

『 神の愚かさは人よりも賢い 』

使徒の働き 26章 24～32節

◆ 愚かな福音

総督フェストの思惑によって始められたパウロとアグリッパ王の会見。パウロの弁明が佳境に入った所で突然フェストが声を上げます。【24節】総督フェストは「パウロが実に学識があって博学であるが、それ故に気が狂ってしまったのだ」と言い放ちました。つまりパウロが語る福音は、知識に基づいていることは分かるが、尋常では無い話し、あり得ない話しだと云うことです。この度のパウロの弁明は実に優れた証しであり、福音の本質を端的に語ったメッセージでありました。パウロはもともと厳格な高等教育を受けた律法学者です。パウロがユダヤ人の中のユダヤ人らしく、イスラエルに与えられた神の約束と希望を解説したことは、まさに博学であるとフェストの目には映ったことでしょう。しかしそのイスラエルの希望こそがあの十字架で死んだナザレのイエスであり、イエス様はすべての者の救いのために復活されたのだと言うメッセージは、総督フェストにとってあり得ない、尋常ではない話しだったのです。

十字架で処刑されたあの男がイスラエルの希望、そしてすべての者のための救い主であると言う福音、ましてやそのイエスが復活したと言う福音は、時代を超えて愚かと捉えられるのです。罪の赦しと救いという意味が語られても、もはや時代と人種を超えて多くの人々に愚かとされる福音。なぜならば、主の福音はこの世の知恵、理解、納得によるものではなく信じる信仰によるものであるからです。

◆ 心を新たにする福音

総督の横檣に対してパウロは答えます。【25節】パウロはこれまで弁明した福音を「まじめな真理のことば」と表現しました。福音は、聞く者にとっては愚かではありますが、信じる者にとっては、真理のことばなのです。

パウロはアグリッパ王に対して直ぐに語り続けます。【26-27節】【王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対して私は率直に申し上げているのです】とは、この福音＝真理のことばを先ずアグリッパ王に受け取って欲しいと解することが出来ます。そもそもパウロは会見の冒頭で次のように発言していました。【(2-3節)アグリッパ王。私がユダヤ人に訴えられているすべてのことについて、きょう、あなたの前で弁明できることを幸いに存じます。特に、あなたがユダヤ人の慣習や問題に精通しておられるからです】と。つまりユダヤ人であるアグリッパ王なら律法に精通している筈であり、モーセや預言者たちが聖書で語ってきた預言を知っている筈であるという事です。パウロは律法に精通し、メシア預言を知っている筈のアグリッパ王に迫ります。【これらのことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも王の目に留まらなかったものはないと信じます】“これらのこと”とはあのナザレのイエスの十字架刑と復活のことに他なりません。イエス様の十字架刑はユダヤ人にとって周知の事実であり、イエス様の復活についてのキリスト者の証言はユダヤ地方のみならず各地方に広がっていました。ナザレのイエスの十字架と復活について、アグリッパ王は見て聞いて知っている筈だとパウロは迫りました。そしてパウロはアグリッパ王に究極の質問を投げかけます。【27節】「律法に精通しておられるユダヤの王ならば、かつてモーセや預言者たちが語ったメシアの受難と復活が、あのナザレのイエスにおいて成就したと信じる事が出来るはずです」核心を突いたパウロの問いかけです。イエス様の十字架と復活の福音を信じるということは、旧約聖書の預言者たちの預言を信じるということに他なりません。逆にモーセや預言者たちが語った預

言を信じているならば、イエスがそのメシアであると信じる事が出来るとパウロは迫ったのです。核心に迫ったパウロの問いに対してアグリッパ王は次のように発言しました。

【28節】王は信じるとも、信じれないとも答えず、パウロが語る福音、真理のことばから自らを遠ざけました。「こんな短時間で説き伏せられるわけには行かない」と逃げたのです。福音は愚かであるで一蹴してしまえば、預言者をも一蹴することになるからです。

主の福音＝真理のことばは、知恵や理解、納得するためならば、愚かなことばに過ぎません。しかし信じる信仰によって心に受け止めるとき、神様は聞く者の心を新たにしてください。それは主なる神様が心に働いてくださるということです。福音は私たちの心を新たにし、この世の価値や判断基準ではなく、主なる神様に喜ばれる人生を第一に求めさせるのです。

◆ 福音のために愚かになる

パウロはアグリッパ王に最後にこう伝えます。【29節】「ことばが少なかりと、多かりと、短時間であれ長時間であれ、私が神様に願い求めていることは、アグリッパ王のみならず、ここで私の証しを聞くすべての人が私と同じようになってくださることです。鎖に繋がれるということではなくて」と締め括りました。アグリッパ王、総督フェスト、ここに集まって話しを聞いていた人々にとってパウロの姿は愚かであったことでしょう。鎖に繋がれている囚人に過ぎません。真理のことば＝福音が愚かであるとする人々にとって、それを伝道する囚人も愚かに見えたことでしょう。この会見の場はここで終わります。アグリッパ王と総督フェスト、王の妹ベルニケは退席する際次のように話し合いました。【30-32節】もはやパウロはローマ法においてもユダヤ王の前においても無罪確定です。にも関わらず鎖に繋がれたままローマへと移送されるのです。もちろんそれは主イエス様が約束されたことであり、主のご計画なのですが、人間的に誰の目から見ても、無罪なのに囚人のままローマに移送されるとは愚かな姿に映るでしょう。

皆さん、愚かな福音を語る囚人パウロもまた愚かでしょうか？パウロは「この福音を聞く皆さんに、私のようになって欲しい」と神に願い求めました。すなわち、「イエス・キリストを信じていただきたい、キリスト者となっていたいただきたい」ということです。自らが本当に愚かな人生を歩んでいる人は、他の人にも私のように愚かになって欲しいとは願いません。パウロは喜びに満たされていました。復活のイエス様とお会いしたパウロは、自らの汚い罪を示され、その罪がイエス様の十字架の死と復活によって赦され、救いに至ることが出来るという福音＝真理のことばを知りました。そして主が任命して下さった宣教のわざに励んだのです。パウロは主の福音のために鎖に繋がれることを愚かとは考えていませんでした。むしろ喜びであったことでしょう。獄中書簡とされるエペソ書でパウロは【キリスト・イエスの囚人となった私パウロ】と自らを表現しています。主イエス様に捕らえられていることを最高の喜びとしていたのです。主に捕らえられ、救いの民として選ばれる喜びの人生を皆さんにも歩んで欲しいと神様に願っているのです。

◆ まとめ・お勧め

イエス・キリストの十字架によって罪が赦され、復活によって永遠のいのちが約束されていると言う福音は、ある人々には愚かでしょう。キリスト者もまた愚かに見えることでしょう。しかし信じる信仰によって、この主の福音＝真理のことばを心に受け止めるとき、私たちの心は新たに変わられるのです。罪の赦しと救いに感謝と喜びが溢れる人生です。そして主なる神様の喜びが私の喜びとなるのです。

【十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。～事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。】（コリント人への手紙第一1章18, 21節）